



Title	イテリメン語の動詞人称接尾辞の機能について
Author(s)	小野, 智香子
Citation	北方言語研究, 1, 23-39
Issue Date	2011-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/45228
Type	bulletin (article)
File Information	nls-1-02.pdf



[Instructions for use](#)

イテリメン語の動詞人称接尾辞の機能について¹

小野 智香子

(千葉大学 特任研究員)

1. はじめに

イテリメン語 (チュクチ・カムチャツカ諸語²: ロシア・カムチャツカ半島) は、動詞の最後尾の接尾辞によって人称を表示する。イテリメン語の定動詞の構造を模式化すると、次のようである。

(1) 法+人称・数 — 動詞語幹 — アスペクト — テンス³ — 人称・数

t'-nu-qzu-al-kicen.

IND.1SG-食べる-DUR-FUT-1

「私は食べ続けるだろう。」

人称・数は接頭辞および接尾辞で表示するが、接頭辞は人称・数と法 (直説法・願望法・仮定法) が一体となった形式である。(1)の例で、接頭辞 t'- は直説法 1 人称単数を示し、末尾の -kicen が 1 人称を表している。

さてイテリメン語では、同じ状況に対していくつかの人称接尾辞を使い分けることができる。例えば次のようである。

(2) a. isx kə́mank nə́nceʔn zəl-neʔn. 「父は私に魚をくれた」

父.SG.ABS 1SG.ALL 魚.PL.ABS 与える-3SG>3PL

b. isx kə́mank nə́nceʔn zəl-umneʔn. 「父は私に私に魚をくれた」

父.SG.ABS 1SG.ALL 魚.PL.ABS 与える-1SG.3PL

(2)の例は両者とも「父が私に魚をくれた」という状況を示しているが、(2a)は「魚を」、(2b)は「私に」くれたということがそれぞれ強調されている。両者の形態的な差異は、動詞の人称接尾辞、すなわち動詞 zəl「与える」の人称接尾辞が (2a)では -neʔn, (2b)では 1 人称単数のマーカー -um が加えられて -um-neʔn となっていることである。

イテリメン語の動詞の人称活用について、Volodin(1976), Georg and Volodin(1999)は自動詞における「主語活用」、他動詞における「主語-目的語活用」、自動詞および他動詞の「斜格

¹ 本稿は、文部科学省科学研究費補助金「イテリメン語の音声・映像資料およびテキストコーパスに基づく記述言語学的研究」(平成 20~22 年度 若手研究 B, 研究代表者: 小野智香子, 課題番号: 20720102) による研究成果の一部である。

² このうち、チュクチ語・コリヤーク語・アリュートル語・ケレク語が同系であることは疑いがなく、筆者はこれらの 4 言語とイテリメン語の同系性については未解決であるという立場をとっているため、本稿では「チュクチ・カムチャツカ語族」ではなく「チュクチ・カムチャツカ諸語」とした。

³ アスペクトは継続相 -qzu, 非継続相 (ゼロ)、テンスは過去 (ゼロ), 現在 -s, 未来 -al がある。特に断らない限り、ゼロマーカーとそのテンス・アスペクトは本稿では表記しない。

補語（間接目的語）活用」の南部方言のパラダイムを挙げている。「主語活用」は自動詞主語、「主語-目的語活用」は他動詞主語と直接目的語、「斜格補語（間接目的語）活用」は間接目的語の人称・数にそれぞれ一致すると記述されている。しかし、(2)のような人称接尾辞の選択に関わる現象に対する説明はない。ボバリクらは(2)のような例を含め、イテリメン語北部方言の動詞の人称の一致について説明を試みている。それによれば、文中に与格名詞や所有要素が存在し、それが文脈上のトピックである場合に斜格補語活用を選択するという(Bobaljik and Wurmbbrand 2002)。

本稿では、以上の先行研究をふまえて、イテリメン語の動詞はどのような活用のシステムを持ち、人称接尾辞にはどのような形態があり、具体的にどのような文法関係や意味役割を示しているかを検証して、その機能を明らかにしたい。第2章では、自動詞の主語活用と他動詞の主語-直接目的語活用、第3章では斜格補語活用、第4章では動詞の人称表示に関するその他の現象について取り上げる。特に第4章で示す現象はこれまでの先行研究では取り上げられてこなかったものであり、イテリメン語の動詞の人称マーカーが単に主語・直接目的語・斜格補語との一致を示すにとどまらないことを主張する。

以下の記述における例文は、筆者のフィールド調査により得られた北部方言のデータおよびヨヘリソンが収集したテキスト(Worth 1961)から引用する。Worth (1961)のテキストはラテンアルファベットによる独自表記であるが、原文の表記のとおりそのまま引用した⁴。また筆者による北部方言のデータとは若干形態が異なるが、必要に応じて Georg and Volodin (1999)のデータも引用する。

2. 自動詞の主語活用と他動詞の主語-直接目的語活用

イテリメン語の動詞は自動詞と他動詞が区別され、両者には(3)に示したような形態統語論上の差異が見られる。なお他動詞は形態的にI類とII類が区別されるが、他動詞の大部分はI類に属し、II類はその数が限られる(əŋk「つかむ」、la「話す」、əntxla「運ぶ」、cel「選ぶ」など)。

(3) 動詞の自他の判別要件

	自動詞	他動詞
A. 動詞の人称活用	主に主語の人称・数	主に主語及び目的語の人称・数
B. 不定詞の形態	語幹-kes	語幹-s (I類) / 語幹-kes (II類)
C. 形動詞の形態	k-語幹-knen	k-語幹-?in (I類) / k-語幹-knen (II類)
D. 統語上の制限	絶対格名詞句は1つまで	絶対格名詞句は2つまで

(3)のA「動詞の人称活用」において、自動詞が「主に主語の人称・数」、他動詞が「主に主語及び目的語の人称・数」のように、「主に」と記したのには理由がある。第3章以下で詳しく議論するが、そうではない場合があるからである。

さて、動詞の人称活用が自動詞と他動詞でどのように異なるのか、以下具体的に見てい

⁴ 原文の大文字は便宜上小文字で表記し、アクセント記号は省略した。

こう。(4) は自動詞の活用パラダイムである。

(4) 自動詞の人称標識 (主語活用)

人称・数	接頭辞		接尾辞	
	直説法	願望法	直説法	願望法
1SG	t- / t'	m-	-k(icen)	
2SG	φ-	q- / q'	-c	-xc
3SG	φ-	(x)an-	-in	
1PL	nt- / nt'	mən-	-k(icen)	
2PL	φ-	q- / q'	-sx	
3PL	φ-	(x)an-	-i?n	

※ 直説法 1SG, 1PL および願望法 2SG, 2PL の接頭辞 t-, nt-, q- は、母音および鳴音 (sonorant) の前の位置で放出音 t', nt', q'-となる。他動詞の場合も同様である。

(4-1) 自動詞の活用 (k'ol「来る」直説法過去時制)

※ 人称代名詞 (絶対格) は次のとおり : kma (1SG), kza (2SG), na (3SG), muza?n (1PL), tuza?n (2PL), itχ (3PL)

- a. kma t-k'ol-k(icen). 「私は来た」 (1SG)
- b. kza k'ol-c. 「おまえは来た」 (2SG)
- c. na k'ol-in. 「彼は来た」 (3SG)
- d. muza?n nt-k'ol-k(icen). 「私たちは来た」 (1PL)
- e. tuza?n k'ol-sx. 「おまえたちは来た」 (2PL)
- f. itχ k'ol-i?n. 「彼らは来た」 (3PL)

(4-2) 自動詞の活用 (k'ol「来る」願望法)

- a. kma m-k'ol-k(icen). 「私は行こう」 (1SG)
- b. kza q-k'ol-xc. 「おまえは行け」 (2SG)
- c. na (x)an-k'ol-in. 「彼は行けばいい」 (3SG)
- d. muza?n mən-k'ol-k. 「私たちは行こう」 (1PL)
- e. tuza?n q-k'ol-sx. 「おまえたちは行け」 (2PL)
- f. itχ (x)an-k'ol-i?n. 「彼らは行けばいい」 (3PL)

イテリメン語の自動詞では、接頭辞によって法と主語の人称・数が、接尾辞によって主語の人称・数が表示される。直説法の接頭辞では 1 人称単数 t- と 1 人称複数 nt- が有標、その他の人称は無標である。願望法の接頭辞では、1 人称単数と複数が形態的に区別されるが、2 人称・3 人称では数の区別は無い。他方、接尾辞を見ると、2 人称・3 人称では数の対立があるが、1 人称では単複とも同じ形態 -k(icen)である (-k は -kicen の短縮形)。

次に、他動詞の人称表示を一覧してみよう。他動詞の主語と直接目的語の人称・数による活用のパラダイムを (5) にまとめた。他動詞には I 類と II 類があり、それぞれ異なる形態を有しているが(前述 (3) を参照)、煩雑さを避けるためここでは I 類のみ一覧を挙げる。

II類の他動詞では、I類の人称接尾辞の直前に *-ki/-xk* などの形態が規則的につく⁵。

(5) 他動詞の人称標識 (主語-直接目的語活用 : I類)

接 頭 辞			接 尾 辞					
主語↓	直説	願望	1SG	2SG	3SG	1PL	2PL	3PL
1SG	t-/ t'-	m-		-in	-cen		-sxin	-ceʔn
2SG	φ -	q-/ q'-	-um(k)		-n (直説) -x (願望)	-uʔm(k)		-ʔn (直説) -xen (願望)
3SG	φ -	xan-	-um(nen)	-in	-nen	-um(neʔn)	-sxin	-neʔn
1PL	nt-/ nt'-	mən-		-in	-n		-sxin	-ʔn
2PL	φ -	q-/ q'-	-um(sx)		-sx	-uʔm(sx)		-sxeʔn
3PL	n-	xan-	-um(nen)	-in	-nen	-um(neʔn)	-sxin	-neʔn

(5-1) 他動詞の活用 (əliɕku 「見る」 直説法過去)

- a. kma kza t'-əliɕku-in. 「私はおまえを見た」
1SG.ABS 2SG.ABS IND.1SG-見る->2SG
- b. kza na əliɕku-n. 「おまえは彼を見た」
2SG.ABS 3SG.ABS 見る-2>3SG
- c. na muzaʔn əliɕku-umneʔn. 「彼は私たちを見た」
3SG.ABS 1PL.ABS 見る-3>1PL
- d. itɕ tuzaʔn n-əliɕku-sxin. 「彼らはおまえたちを見た」
3PL.ABS 2PL.ABS IND.3PL-見る->2PL

(5-2) 他動詞の活用 (əliɕku 「見る」 願望法)

- a. kza na q'-əliɕku-x. 「おまえは彼を見ろ」
2SG.ABS 3SG.ABS DES.2-見る-DES.2SG>3SG
- b. kza itɕ q'-əliɕku-xen. 「おまえは彼らを見ろ」
2SG.ABS 3PL.ABS DES.2-見る-DES.2SG>3PL

以上が、イテリメン語の自動詞と他動詞の人称活用についての、いわば語学の教科書的な記述である。ところがイテリメン語では、主語または直接目的語以外の人称を動詞の接尾辞で表示することがあり、その頻度は決して低くない。第3章では、そのような動詞の人称マーカについて、具体的な使用例を挙げながら論じたい。

3. 斜格補語活用

イテリメン語の動詞における人称接尾辞は、主語と直接目的語だけでなく、それ以外の関与者を表示することができる。

⁵ 例えば、I類の他動詞 *oc'* 「～を呼ぶ」と II類の他動詞 *əntɕla* 「～を運ぶ」の1人称単数主語・2人称単数目的語現在形は、それぞれ *t'-oc'-ez-in*, *t'-əntɕla-s-xkin*, 1人称単数主語・3人称単数目的語現在形は *t'-oc'-es-cen*, *t'-əntɕla-s-kicen* となる。

- (6) a. isx zun-s-in. 「父は住んでいる。」
 父.SG.ABS 住む-PRES-3SG
- b. ənan isx zun-s-kinen. 「彼の父は住んでいる。」
 3SG.POSS 父.SG.ABS 住む-PRES-3SG.OBL
- c. isx ənan zun-s-kinen. 「父は彼のところに住んでいる。」
 父.SG.ABS 3SG.LOC 住む-PRES-3SG.OBL

(6a)は、自動詞 *zunt*⁶「住む」の人称接尾辞 *-in* が主語である絶対格単数名詞 *isx*「父」に一致する場合である。一方(6b)では 3 人称単数代名詞所有形 *ənan*「彼の」、(6c)では 3 人称単数代名詞場所格 *ənan* が現れ、動詞の人称接尾辞は *-kinen* という別の形態をとっている。

これは、ヴォロージンが「所有活用(Possessivnoe sprjazhenie)」「斜格補語活用(Kosvenno-objektnoe sprjazhenie)」と呼んでいたものに該当する(Volodin 1976 : 256-268)。彼は、所有を表す動詞 *ci*「～の所にある」がその所有者の人称に応じて活用することを示し、また存在動詞 *ɬ*「ある、である」を典型的な例に挙げ、名詞の向格の人称に一致する活用について、2 種類の別の活用体系としてそれぞれのパラダイムを提示している。後に両者は統合され「間接目的語活用 (Die indirekt-objective Konjugation)」と名付けられた(Georg and Volodin 1999: 145-148)。

(7) 間接目的語活用の人称パラダイム (Georg and Volodin 1999: 145)⁷

主語の 人称	間接目的語の人称		
	3SG	2PL	3PL
1SG	t- -kinen	t- -kisxen	t- -kipnen
2SG	-kinen		-kipnen
3SG	-kinen	-kisxen	-kipnen
1PL	n- -kinen	n- -kisxen	n- -kipnen
2PL	-sx ※1		-sx ※2
3PL	-kine?n	-kisxe?n	-kipne?n

※1 命令法 (=願望法) では *-kinensx*

※2 命令法 (=願望法) では *-kipnensx*

(7)に見られるように、間接目的語の人称として挙げられているのは 3 人称単数、2 人称複数および 3 人称複数のみである。主語活用 (自動詞) および主語-直接目的語活用 (他動詞) の人称接尾辞とは異なる形態の接尾辞を集めてまとめ、パラダイムとして提示している。この表が示しているのは、3 人称単数間接目的語「彼/彼女に」を表すのが *-kine(?)n*、2 人称複数間接目的語「おまえたちに」を表すのが *-kisxe(?)n*、3 人称複数間接目的語「彼らに」を表すのが *-kipne(?)n* (主語が 3 人称複数の場合に声門閉鎖音 ? がそれぞれ挿入される)。

⁶ 語幹末の無声側面摩擦音 *ɬ* は、現在時制のマーカ *-s* の直前の位置で脱落する。

⁷ Georg and Volodin (1999) は南部方言に基づいて記述されているが、巻末に北部方言の記述があり、南部方言と異なる部分のみが取り上げられている。斜格補語活用の人称接尾辞のパラダイムについて、北部方言と南部方言の間に差異は見られない。

ただし主語が2人称複数の場合に限り -sx が現れる、ということである。

さて、この「間接目的語」というのは、具体的にはどのような意味役割を有しているのだろうか。以下で、実際の使用例を見ていこう。3.1 節では自動詞、3.2 節では他動詞の人称表示について、斜格補語活用に該当する例を挙げながら議論する。

3.1. 斜格補語を表す人称接尾辞：自動詞の場合

それではまず自動詞について、形態・人称別に具体例を挙げながら考察していこう。
-kine(?)n は3人称単数を表示し、その主要な意味役割は動作・行為の方向・場所、主語の所有者などである。主語が単数の時は -kinen, 複数の時は -kine?n となる。

(8) -kine(?)n : 3 人称単数 (方向)

a. mite ənank χaqen-s-kinen.

ミティ.ABS 3SGALL 怒る-PRES-3SGOBL

「ミティは彼に向かって怒っている。」

b. lemeɬ q'la-kinen mitenk, kəmanɬ tenlay nonom

それから DES.2-言う-3SGOBL ミティ.ALL 1SGALL 良い.ABS 食べ物.ABS

an-sk-qzu-nen.

DES.3-作る-DUR-3>3SG

「それから、ミティに言いなさい、私により食事を作るように。」

c. k'əɬicku-ʔin nin qɣa?n li niyniɬ ənank k'o-s-kine?n.

PP-見る-PP 3SG 犬.PL.ABS とても たくさん 3SGALL 来る-PRES-3SGOBL

「犬たちがとてもたくさん彼のところにやって来るのが見えた。」

(8a)では、動詞 $\chi aqen-s-kinen$ 「怒っている」が ənank 「彼に」向かっていること、(8b)では $q'la-kinen$ 「言いなさい」が $mitenk$ 「ミティに」向かっていることを示している。3人称単数に動作・行為が向かっていることを強調する必要がなければ、それぞれ $\chi aqen-s-in$ 「怒っている」、 $q'la-xcix$ ⁸ 「言いなさい」となる。(8c)は主語が複数のケースである。単に複数の犬が来ることを言うには、 $q\text{ɣ}a?n\ k'o-s-i?n$ 「犬たちがやって来る」と表現される。

(9)に -kine(?)n が3人称単数所有・場所を表示しているケースを挙げる。

(9) -kine(?)n : 3 人称単数 (所有・場所)

a. wun kutxa?n ləʔl ejep-kine?n.

すると クトフ.PL.POSS 目.PL.ABS 閉じる-3SGOBL

「すると、クトフの目(複数)が閉じた。」

b. $\chi oqen$ χaq k-təl-aɬ-qzu-knin txin ci-s-kine?n li əna?n

そこで 知って PP-である-OPT-DUR-PP 3PL ある-PRES-3SGOBL とても 3SG.PL.POSS

⁸ la 「言う、話す」はII類の他動詞で、願望法2人称単数主語・3人称単数目的語の人称接尾辞は -xcix となる。

p'e?n wimsxei?n.

子.PL.ABS 女.PL.MDF

「そこで彼らは知りたかった、彼には (=彼の) 娘 (複数) がいるかどうかを。」

c. ənan isx zalk k'o-s-kinen.

3SG.POSS 父.SG.ABS 後ろ 来る-PRES-3SG.OBL

「彼の父は (彼の) 後ろからやって来る。」

(9a)では、*ejep-kine?n*「閉じた」のは「クトフの」目 (複数) であること、(9b)では「彼に」娘たちが *c'i-s-kine?n*「いる」ことを示している。(9c)では、*k'o-s-kinen*「やって来る」のは「彼の」父であるとも、「彼の 後ろから」とも、どちらとも取れる。これらの動詞を、主語に呼応した活用をさせるならば、それぞれ *ejep-i?n*, *ci-z-i?n*, *k'o-s-in* となる。

ところで、(8)および(9)に挙げた例は述語動詞の人称接尾辞と一致する名詞句が明示されており、述語動詞との結びつきが強いため比較的わかりやすいが、次に挙げる(10)は少々異なる様相を呈している。

(10) -kine(?n) : 3 人称単数 (その他)

a. k-kəməst-knen əzank sinanewt, k'-əl'cku-?in qəmsɣank kutxan lu-s-kinen.

PP-出る-PP 外に シナゲウト.ABS PP-見る-PP 穴.SG.LOC クトフ.POSS 燃える-PRES-3SG.OBL
「シナゲウトは外に出ると、クトフの穴のところで火が灯っているのを見た。」

b. k'-ənkzeɫ-?an kutx enun koxank, k-ləwol-knen kutx, la-z-in,

PP-残す-PP クトフ.ABS その 石.SG.LOC PP-座る-PP クトフ.ABS 座っている-PRES-3SG

sinex mumwu?n k'olit-es-kine?n koxank li plaxa?n i kutx

一方 波.PL.ABS 来る-PRES-3SG.OBL 石.SG.ALL とても 大きい.PL.ABS そして クトフ.ABS

n-linset-es-cen i?eɫ.

PASS-注ぐ-PRES-3SG 水.INST

「クトフはその石のところに残された。石の上に腰を下ろした。座っていると、とても大きな波が石にやって来て、クトフは水をかぶってしまう。」

(10a)では *lu-s-kinen*「火が灯っている」のは「クトフの (隠れていた) 穴」であること、つまり、灯が灯っているのがクトフに関連していることを示している。さらに(10b)では、波が *k'olit-es-kine?n*「来る」方向として *koxank*「石へ」という名詞句が明示されているが、その前にクトフが石の上に座っていた描写があり、波が「クトフに向かって」やって来たことは自明である。(10b)のケースでは、形態的に一致する名詞句 (=クトフまたは3 人称単数代名詞の斜格形) が現れなくても、文脈上クトフを中心に話が進んでおり、*-kine?n* が表しているのはクトフに関することであると認められる。

次に、人称接尾辞 *-kipeni(?n)* の例を(11)に挙げる。*-kipeni(?n)* は3 人称複数を表しており、主語が単数の場合は *-kipenin*、主語が複数の場合は *-kipeni?n* となる。

(11) -kipeni(?)n : 3 人称複数

a. kəman ipʎx k-zvonʎl-knin v ʊzbekistan, ɣoqen txiin
1SG.POSS 友.SG.ABS PP-電話する-PP ウズベキスタンに(RUS) そこに 3PL.POSS
ipʎx ʎ-qzu-kipenin.
友.SG.ABS いる-DUR-3PL.OBL

「私の友達はウズベキスタンに電話した。そこには彼らの友達がいた。」(所有)

b. stajkaʎn txiiʎn ʎi omlaxaʎn ʎ-qzu-kipeniʎn.
小屋.PL.ABS 3PL.PL.POSS とても 暖かい.PL.ABS である-DUR-3PL.OBL

「彼らの小屋(複数)はとても暖かかった。」(所有)

c. won kma t-keli-cen xtaank, miʎaneiʎn atnok ʎ-qu-kipenin
ほら 1SG.ABS IND.1SG-書く-1>3SG ここに 全て.POSS 家.LOC である-DUR-3PL.OBL
kwaʎfonka.
クワションカ.ABS

「ほら、私はここに書いた。誰の家にもクワションカ(=食べ物の名前)があった。」(場所)

d. kutxa ʎi pəʎq tyeank ɣaqen-s-kipenin.
クトフ.ABS とても 激しく 3PL.ALL 怒る-PRES-3PL.OBL

「クトフは彼らに対して激怒している。」(方向)

e. miʎ qʎɣal k-ʎale-qzu-kneʎn jeməʎqank, miʎ əŋqa tyeanaxal sxəla-qzu-s-kipenin.
全て 日 PP-歩く-DUR-PP.PL ツンドラ.LOC 全てのもの.ABS 3PL.EL 走る-DUR-PRES-3PL.OBL

「彼ら(クトフの息子たち)は一日中ツンドラを歩いたが、(獲物は)全て彼らから逃げてしまう。」(出処)

(11)で接尾辞 -kipeni(?)n は、所有者・場所・方向などが3人称複数であることを示している。(11b)では、主語 stajkaʎn「小屋」と所有者 txiiʎn「彼らの」の両方とも3人称複数だが、動詞 ʎ-qzu-kipeniʎn は txiiʎn「彼らの」の方に呼応している。というのは、動詞が主語 stajkaʎn「小屋」に呼応する場合は ʎ-qzu-iʎn (自動詞主語3人称複数形)になるからである。

(11e)では、クトフの息子たちについて話が進む中、森に狩りに出かけても、獲物に逃げられてしまって何も収穫が得られないという状況が語られている。この文の最後に位置する動詞 sxəla-qzu-s-kipenin「走っている」における人称接尾辞 -kipenin が、「彼ら(=クトフの息子たち)から」逃げていることを示している。

次に、(12)に接尾辞 -kixxen(2人称複数)の例を挙げる。なお、母音交替を起こした -kesxen という異形態がある。

(12) -kixxen /-kesxen : 2 人称複数

a. neʎn təzank ec'k'aq ʎ-qzu-aʎ-kixxen.
今 2PL.LOC 悪く である-DUR-FUT-2PL.OBL

「今、おまえたちに悪いことが起きるだろう」(場所)

b. q-oc-sx txlocx iwʎqelqen, xn-amɣal-qazo-kesxen.
DES.2-呼ぶ-2PL 老婆.SG.ABS イウリケルヘン.ABS DES.3-語る-DUR-2PL.OBL

「(おまえたち) イウリケルヘンおばあちゃんを呼びなさい、彼女に昔話を話してもらいなさい。」(Worth 1961: 61) (方向)

c. nen-lme kusklnecu qol-al-kisxen qei-lme inli-ł iti-qaz-a-xin.
今 クスリネク.ABS 来る-FUT-2PL.OBL そして シラミを探す-INF 命じる-DUR-FUT-3>3SG

「今、クスリネクが(おまえたちのところに)来るよ、そしてシラミを探すように命じるだろう。」(Worth 1961: 185) (方向)

d. lo-zx, mica salan lilixł k-sunł-ki, qat ina qamzante-kesxen,
思う-2PL 良く 後の 姉妹.SG.ABS PP-暮らす-PP もう 3SG.ABS 結婚する-2PL.OBL
axsx-kesxen.

出産する-2PL.OBL

「おまえたちは思ったか、妹は元気に暮らしていると。(おまえたちの妹である) 彼女はもう結婚して、子を産んだ。」(Worth 1961: 40) (所有)

(12b)は、子供たちが母親に「昔話をして」とねだっているところ、母親が拒否して、「イウリケルヘンおばあちゃんにお話をしてもらいなさい」と促している。xn-amjal-qazo-kesxenにおける動詞 amjal「物語を語る」は自動詞であり、お話をしてもらうのは子供たち(=2人称複数)というわけである。(12d)は離れ離れになってしまった妹がどうしているか気にかけている兄たちに対する発話で、qamzante-kesxen「結婚した」、axsx-kesxen「出産した」のように、自動詞にそれぞれ接尾辞 -kisxen (-kesxen)がついている。これにより、発話者は兄たち(=2人称複数)に対してまさに「おまえたちの」妹はもう結婚して子供を産んだぞ、ということ強調していると思われる。このように、(12a)以外は2人称複数を表す名詞句が明示されていないが、文脈から -kisxen (-kesxen) が2人称複数の場所・所有・方向を示していることがわかる。

さて、テキスト中には -kisxenin (-kesxanen は母音交替した異形態) という接尾辞が現れることがあるので、これを(13)に挙げる。ただし現在のところ -kisxen との違いはわかっていない。

(13) -kisxenin /-kesxanen : 2人称複数

a. tuzaʔn il-es-sx iʔ, sinex təzin isx iza-s-kisxenin,
2PL.ABS 飲む-PRES-2PL 水.ABS 一方 2PL.POSS 父.SG.ABS 死ぬ-PRES-2PL.OBL

li pəlq il-a-s-kisxenin.
とても 激しく 飲む-OPT-PRES-2PL.OBL

「おまえたちは水を飲んでいる。なのに(おまえたちの)父は死にそうだ、とても水を飲みたがっている」(所有)

b. zaq əŋqa ło-q mitenk, kma təzink t-ł-qzu-kisxenin.
DES.NEG 何か.ABS 言う-NEG ミティ.ALL 1SG.ABS 2PL.LOC IND.1SG-いる-DUR-2PL.OBL

「ミティには何も言うな。私は(おまえたちのところに)いた。」(場所)

c. mexnu na təzwink ł-qzu-kisxenin.
実際 3SG.ABS 2PL.LOC いる-DUR-2PL.OBL

「本当は彼はおまえたちのところにいたのか。」(場所)

d. kima kintnink hinc m-alc-kesxanen.
1SGABS 中.LOC FUT.NEG DES.1SG-寝る-2PL.OBL

「私は (おまえたちの) 真ん中には寝ない。」(Worth 1961: 78) (場所)

e. m-la-qazo-kesxanen kmilwen uwik tazwanke.
DES.1SG-話す-DUR-2PL.OBL 私自身 自分.SGABS 2PL.ALL

「私自身が自分のことをおまえたちに話そう。」(Worth 1961: 48) (方向)

f. a:zozk kima hinc m-k'ol-kisxenin tezwanke, imxes kima a:zozk
明日 1SGABS FUT.NEG DES.1SG-来る-2PL.OBL 2PL.ALL やはり 1SGABS 明日
m-qenisi-kicen.
DES.1SG-休む-1

「明日私はおまえたちのところへ来ない。明日は私は休む。」(Worth 1961: 220) (方向)

g. tuza zaqcin kenezi-kaq, tizwin xkink n-ckagel-kesxanen, hinc
2PL.ABS DES.NEG 考える-NEG 2PL.POSS 手.LOC IND.1PL-落ちる-2PL.OBL FUT.NEG
-manke xn-il-kisxenin.
どこ.ALL DES-である-2PL.OBL

「おまえたち、心配するな、私たちはおまえたちの手の中に落ちた。私たちはどこへも行かないよ。」(Worth 1961: 30) (場所・出处)

(13)もまた、2人称複数の所有・場所・方向等を表している。(12)と(13)を比べてみると、(12)では主語が3人称単数のみ、(13)では主語が3人称単数のほか(13a, 13c)、1人称単数の場合もある(13b, 13d, 13e, 13f)。これが決定的な違いであるかどうかは、-kisxen が1人称主語の場合に現れるか否かを検証する必要がある。なおヴォロージンは南部方言の記述において -kisxenin と -kisxen を区別せずに扱っている(Volodin 1976)。

3.2. 斜格補語を表す人称接尾辞：他動詞の場合

斜格補語活用は自動詞のみに特徴的な現象ではなく、他動詞においても実現する。ヴォロージンは南部方言の記述において、他動詞の斜格補語の人称接尾辞 -nen (3人称単数)、-penen (3人称複数)、-sxen (2人称複数) を挙げている(Volodin 1976: 268)。これらの接尾辞の形態は、自動詞の斜格補語人称接尾辞から自動詞のマーカである -ki を抜き取った形態に相当する。

他動詞の斜格補語に対する人称表示はどのようになっているのか、以下に具体例を挙げる。

(14) -nen : 3人称単数

a. mank kza muzaʔn ənqle-aʔ-uʔmkʔ - ənank t'ənqle-aʔ-nen.
どこ.ALL 2SGABS 1PL.ABS 送る-FUT-1PL 3SGALL IND.1SG-送る-3SG.OBL

「おまえは私たちをどこへ送るのか — 彼のところに送ります。」(方向)

b. tuzaʔn enu ikra miʔ zəmpli-qzu-nen, niʔ znaj k'enkən.
2PL.ABS この.ABS イクラ.ABS 全て 売る-DUR-3SG.OBL 知らない(RUS) 誰.SG.ALL

「おまえたちはこのイクラを全部売ってしまった。誰に (売った) か知らないけど。」(方向)

(14a)では、ənank「彼のところに」、(14b)では k'enkəŋ「誰に」との一致がみられるが、通常の他動詞文で現れる 2 人称複数マーカー -sx が現れていないことは注目に値する。また -nen は(5)に挙げた他動詞の主語-直接目的語活用における、3 人称主語・3 人称単数目的語を表す接尾辞と同一の形態である(14)'。

(14)' na li niqa ənst-ate-z-nen caj.
 3SG.ABS とても 速く わかす-HAB-PRES-3>3SG 茶.SG.ABS
 「彼女はとても速く茶をわかすものだ。」

(14)' は、主語が 3 人称単数絶対格代名詞 na「彼／彼女」、直接目的語が 3 人称単数絶対格名詞 caj「茶」であり、動詞の人称接尾辞は (14a) (14b)と同様に -nen という形態である。

次に、3 人称複数斜格補語を表す -peni(?)n の例を挙げる。

(15) -peni(?)n : 3 人称複数

soxal sinex qojacel inut-at-ez-i?n, tʃəltʃəl, n-ləm-at-es-peni?n,
 そこ.EL 一方 トナカイ.INST 荷積みする-HAB-PRES-3PL 肉.ABS PASS-殺す-HAB-PRES-3PL.OBL
 li slavno li zirnije enu?n.
 とても 良い とても 脂の多い これ.PL.ABS

「そこ (コリヤークたちのところ) からトナカイを荷造りした、(トナカイの) 肉、(彼らのところで) 殺される、これら (=肉) はとても良い、とても脂がのっている。」

(15)では、コリヤークたちの集落から帰る時、トナカイの肉をお土産にもらったという状況が述べられている。動詞は n-ləmat-es-peni?n という形態をとっており、-peni?n という人称接尾辞により「彼ら (=コリヤークたち) のところで (殺される)」ことに言及されている。

次に、-sxin が 2 人称複数斜格補語を表している例を(16)に挙げる。

(16) -sxin : 2 人称複数

a. t-zəl-ał-sxin təzank kəman p'ekucʏ.
 IND.1SG-与える-FUT-2PL.OBL 2PL.ALL 1SG.POSS 子.SG.ABS

「私はおまえたちに私の子 (=娘) をやる。」(方向)

b. enu dʒengi?n təzank n-zəl-sxin, enu tuza?n mił il-qzu-sx.
 この お金.PL.ABS 2PL.ALL PASS-与える-2PL.OBL これ 2PL.ABS 全て 飲む-DUR-2PL

「このお金がおまえたちに渡された。おまえたちは全部 (このお金で) 飲んでしまった。」(方向)

(16)の例では、2 人称複数向格の代名詞 *təzank* 「おまえたちへ」 への一致を示している。なお接尾辞 *-sxin* は 2 人称複数直接目的語を示す接尾辞と同じ形態である(16)'。

(16)' *kma tuzaʔn t'-jawna-sxin.*
 1SGABS 2PL.ABS IND.1SG-迎える->2PL
 「私はおまえたちを出迎えた。」

(16)' では、他動詞 *t'-jawna-sxin* のように、接尾辞 *-sxin* が現れ、直接目的語である 2 人称複数絶対格代名詞 *tuzaʔn* に一致している。このように、*-sxin* は 2 人称複数の直接目的語および斜格補語の両方を表しうる。

ヴォロージンは他動詞斜格補語活用の人称接尾辞 *-nen* (3 人称単数)、*-penen* (3 人称複数)、*-sxen* (2 人称複数) の 3 種類を挙げているが (南部方言、上述。Volodin 1976: 268) このうち斜格補語にのみ使用されるのは *-penen* (*-peni(?)n*) だけで、*-nen* と *-sxen* (*-sxin*) は (14)' (16)' で見たように、直接目的語の場合の接尾辞と同一形態である。この 3 種類以外の人称の斜格補語を表すには、どのような形式を用いているのだろうか。1 人称の場合を見よう。

(17) *-u(?)m* : 1 人称

a. *xatʰa bi ne kza c'e-s-um kəmənk, q-k'ot-xc ne*
 せめて SBJV INDR 2SGABS 入る-PRES-1SGOBL 1SGALL DES.2-来る-DES.2SG INDR
mən-caja-k.
 DES.1PL-茶を飲む-1

「せめておまえが私のところに入ってくればいいのに。来なさいよ、お茶を飲みましょう。」
 (方向)

b. *mił əŋqa xk'eł n-ciʔŋni-qu-uʔm məzənk.*
 全てのもの.ABS 手.INST PASS-縫う-DUR-1PL.OBL 1PL.ALL
 「すべてのものが私たち (のため)に縫われていた。」 (方向)

(17a)は *kəmənk* 「私のところに」、(17b)は *məzənk* 「私たちへ」にそれぞれ一致しているが、*-um* は 1 人称単数直接目的語、*-uʔm* は 1 人称複数直接目的語を表示する人称接尾辞と同じ形態である (17)'。

(17)' *q-tqəz-um kma kijecʰal.*
 DES.2-渡す->1SG 1SGABS 川.EL
 「私を川の向こうへ運べ。」

2 人称単数斜格補語 (「おまえに」 など) を表す特別な接尾辞は観察されていない。ひとつの理由として、2 人称単数の直接目的語を表す接尾辞 *-in* が自動詞 3 人称単数主語を表す *-in* と同形態であることにより、形態上の差異が見えなくなっている可能性も考えられる。

4. 動詞の人称表示に関するその他の現象

第3章では斜格補語を表す動詞の人称接尾辞について見てきた。その人称接尾辞が表す主な意味役割は、所有、場所、方向などであった。ところで、イテリメン語テキストの中には、主語、直接目的語、所有者や場所、方向といった枠にとどまらない人称接尾辞の使用例が見られる。本章では、こうした現象について具体例を挙げながら考察する。

以下はいわゆる「遠い一致 (long-distance agreement)」に該当するケースである。Long-distance agreement とは、一致の範囲 (domain) が節を超えて存在し、従属節の外の要素と中の要素が一致するという現象を含む (Corbett 2006: 65-66)。

(18)

a. n-lo-z-um woxs, [kma lem k'-ejen-knin manxal].

IND.3PL-思う-PRES-1SG 多分 1SG.ABS も PP-来る-PP どこか.EL

「多分 (彼らは) 思っているのだ。私も別のところから来た人間 (=よそ者) だ。」

b. atnok xaqaq n-il-qzu-um, [lawal kma wotk t'-jezdi-s-k].

家.LOC 知らない PASS-である-DUR-1SG なぜ 1SG.ABS ここに IND.1SG-乗り物で行く-PRES-1

「家では、なぜ私がここに向かっているか知らなかった」

c. lo-qzu-umnen, [xtaank t'-zun-s-kicen].

思う-DUR-3>1SG ここに IND.1SG-住む-PRES-1

「(彼は) 私がここに住んでいると思っていた。」

(18)の例では、すべて1人称単数を表す接尾辞 -um が現れている (他動詞の人称標識 (5) を参照)。(18a)では n-lo-z-um 「(彼らは) 思っている」のは「私」に関することであり、(18b) xaqaq n-il-qzu-um 「知らなかった」、(18c) lo-qzu-umnen 「(彼は) 思っていた」も同様である。すなわち、ここでは思考・認識の内容が「私」に関っていることを表している。次の(19)も典型的に珍しい表現である。

(19) kəms-t-iʔn kestxal kasxəʔn ekuʔnc, li pəlq wənkew-iʔn kəmank, əlaq

出る-3PL 家.EL 2 女の子.PL.ABS とても 激しく 喜ぶ-3PL 1SG.ALL まるで

isx n-jawna-umnen.

父.SG.ABS IND.3PL-会う-3>1SG

「二人の女の子は家から出て、私に対してとても喜んだ。まるで父に出会ったかのように」

(19)では、「女の子たちが父に出会った」ことを言いたければ、通常は3人称複数主語と3人称単数直接目的語の組み合わせで "əlaq isx n-jawna-nen" と表現すればよいはずである。人称接尾辞を -umnen とし、1人称単数(-um)を表示することによって、実際に出会ったのが「私」であることを表現しているのである。なおタミル語にも似たような現象があり、Corbett はこれを一致の意味上のミスマッチ (meaning-meaning mismatches) と呼んでいる (Corbett 2006: 161)。

(20)~(22)に -kixxenin の例を挙げる。-kixxenin が2人称複数斜格補語を表示することは上

で述べたが、以下の例ではその意味役割を示す2人称複数の名詞句は明示されていない。

- (20) kima qam t-s-kisxenin yalgat-ał-kaq hoke, pilkli tee
1SGABS NEG IND.1SG-である.PRES-2PL.OBL 移動する-OPT-NEG そこへ むしろ ここ
t-sunt-qaz-ał-kicen kmil-wenatl.
IND.1SG-住む-DUR-FUT-1 私自身

「私はそこに（おまえたちと一緒に）移動したくない。むしろここに自分1人で住むよ。」
(Worth 1961: 119) (共同)

(20)は、複数の人間で一緒に行動したが、他の人々が別の場所に移動しようとするところ、
「私」だけが一緒に移動しないでその場に留まることを宣言するという状況である。
t-s-kisxenin は「ある／～である」という意味の存在動詞であるが、この例では否定文の補助動詞として振る舞い、そこに2人称複数マーカーの -kisxen(in)がついている。その意味役割は、文脈から、共同（おまえたちと一緒に）といったものではないかと推測できる。

(21)

- a. potom-lme, nen-lme zawtra kmi'twinetł m-il-kisxenin, tuza-lme tee
後で さあ 明日 私自身 DES.1SG-行く-2PL.OBL 2PL.ABS ここに
q-t-qazu-sx. mozit-lme, ma, aŋqa t-im-ał-kisxenin.
DES.2-いる-DUR-2PL もしかして どこか 何か.ABS IND.1SG-見つける-FUT-2PL.OBL

「あとで、明日には私が自分で（おまえたちのために）行く。おまえたちはここにいなさい。もしかしたらどこかで何か（食べ物）を おまえたちのために 見つけて来るよ。」 (Worth 1961: 215) (目的)

- b. efufe, t-qeni-kisxenin kima, pesge!
やれやれ IND.1SG-疲れる-2PL.OBL 1SGABS 子.PL.VOC

「やれやれ、私は（おまえたちのせいで）疲れた、子供たちよ。」 (原因)

(21a) m-il-kisxenin 「（おまえたちのために）行く」や (21b) t-qeni-kisxenin 「（おまえたちのせいで）疲れた」における2人称複数の人称マーカー (-kisxenin) は、原因・目的・理由といった意味で使われている。il「行く」、qeni「疲れる」という自動詞は、そのような項を要求する動詞ではない。

- (22) defki, q-izxli-zx, lme, ekecxse, t-gil-a-s-kisxenin.
娘たち(RUS) DES.2-目覚める-2PL INDR 女の子.PL.VOC IND.1SG-飲む-OPT-PRES-2PL.OBL
「娘たちよ、起きなさい。娘さんたち、私は（水が）飲みたい。」 (Worth 1961: 254)

(22)では自動詞 t-gil-a-s-kisxenin「私は飲みたい」に2人称複数の人称接尾辞がついている。この場合、「おまえたちの水」または「おまえたちのところで飲みたい」という意味で、所有または場所を表していると考えられる。

最後に、3人称の接尾辞 *-neʔn* の例を挙げよう。

- (23) *enuʔn ze ənaʔn tuʌhiʔn, ʒaq i-s-iʔn, li playaʔn,*
 この.PL EMPH 3SGPL.POSS 靴.PL.ABS 知って である-PRES-2>3PL とても 大きい.PL.ABS
mank jaq kmulum m-tzəl-neʔn? əŋqənesx kəmanx
 どのように 一体 私自身 DES.1SG-身につける-3PL.OBL 何のために 1SGLOC
m-c'iri-ceʔn?
 DES.1SG-盗む-1>3PL

「それは彼女の靴じゃないの。知ってるでしょ、すごく大きいサイズの。どうして私が履けるの。何のために私がそれを盗むっていうの。」

(23)は、「私」が「彼女」に意地悪をされた話の中で現れた表現である。「彼女」は自分の靴がなくなった、「私」が盗んだのだと学校で言いふらし、「私」は本当は盗んでいないのにも関わらず、誰も信じてくれなかった、という文脈の中で語られた。*m-tzəl-neʔn*「私が履く」は、3人称複数目的語(=「靴を」)を表示するのであれば、「*m-tzəl-ceʔn*」のように、1人称主語・3人称単数直接目的語の接尾辞 *-ceʔn* を使えばよい(主語-直接目的語活用 (5) 参照)。しかし、ここでは「彼女が私にひどいことをした」という文脈であり、*m-tzəl-neʔn* における人称接尾辞 *-neʔn* によって「彼女の靴」について語っていることを示しているのである。

5. まとめ — イテリメン語の動詞の人称接尾辞が表すもの

第3章では動詞の斜格補語活用を取り上げ、直接目的語(絶対格名詞)ではない様々な補語の人称への一致を見た。その主な意味役割は、場所・所有・方向であった。また第4章では、節を超えた人称の一致、また当該の動詞が項として要求しない要素であるような、原因・目的・理由などに関する人称が接尾辞に現れる現象が観察された。以上から明らかになったことは、次のとおりである。

- (24) a. 動詞の人称接尾辞は、主語・直接目的語のほか、斜格補語の人称に一致する。
 b. 斜格補語の人称接尾辞について、自動詞には3人称単数・複数および2人称複数に専用の接尾辞がある (*-kineʔn*, *kipeniʔn*, *-kixxen(in)*)。他動詞の場合は、3人称複数に専用の接尾辞がある (*-peniʔn*)。1人称の *-uʔm*, 2人称複数の *-sxin*, 3人称の *-nen* は主語-直接目的語活用の人称接尾辞と同じ形態を持つ。
 c. 動詞で示される人称の主な意味役割は、動作主・被動者・所有・場所・方向であるが、動詞が項として要求しない要素(原因・目的・理由など)に該当する人称も表示することが可能である。

ボバリクらはイテリメン語北部方言における一致のシステムについて説明を試みている。彼らによれば、自動詞が主語活用をするか斜格補語活用をするかの選択について、文中に与格名詞または所有者名詞があり、かつそれらがもっとも“prominent”である場合に、斜格補

語活用が選択される(Bobaljik and Wurmbbrand 2002)。また、ヴォロージンらは斜格補語と一致する動詞の人称接尾辞として、3 人称および 2 人称複数しか挙げていないが(南部方言、Volodin 1976, Georg and Volodin 1999)、実際には 1 人称に一致する例も数多く存在する。

動詞による格のマーキング（斜格を含む）については、アサバスカン諸語やメキシコの Tlapanec 語(Oto-Manguan)などの主要部標示型(head-marking)の言語において報告されている(Wichman 2008 など)。これらの言語では、名詞は格標識を持たず、動詞の側で形態的に格を標示する。イテリメン語においては、主語および直接目的語の名詞は主格・対格の区別を持たないが、その他の斜格（向格、場所格、出格、共格など）については名詞で格を表示するので、アサバスカン諸語や Tlapanec 語のように極端な主要部標示型の言語というわけではない。イテリメン語の動詞の最後尾に位置する接尾辞が特定の格をマークするものでないことは、上述のとおりである。

対応する名詞句の有無に関わらず、動詞は人称接尾辞を選択しなければならない。第 4 章で述べたように、人称接尾辞は「どんな文脈で語られているか」という談話機能が非常に大きく関わっていると思われる。特に「誰について／誰の話題を」語っているかを示すことが、動詞の人称接尾辞の本質的な働きなのではないだろうか。イテリメン語における動詞の人称接尾辞の選択は、おそらく文法関係や意味役割に依存するのではなく、このような談話機能に関わる問題である。

略号

1 : 1 人称	2 : 2 人称	3 : 3 人称	ABS : 絶対格
ALL : 向格	EMPH : 強調	DES : 願望法	DUR : 継続相
EL : 出格	FUT : 未来	HAB : 習慣相	IND : 直説法
INDR : 間接話法	INST : 具格	LOC : 場所格	MDF : 修飾形
NEG : 否定	OBL : 斜格補語	OPT : 希求	PASS : 受身
PL : 複数	POSS : 所有	PP : 過去分詞	PRES : 現在
RUS : ロシア語	SBJV : 仮定	SG : 単数	VOC : 呼格

参考文献

- Bobaljik, Jonathan D. and Wurmbbrand, Susi (2002) Notes on Agreement in Itelmen. *Linguistic Discovery*. Vol.1, Issue 1.
- Corbett, Greville G. (2006) *Agreement*. Cambridge University Press.
- Georg, Stephan and Volodin, Aleksandr P. (1999) *Die itelmenishce Sprache. Grammatik und Texte*. Harrasowitz, Wiesbaden.
- Volodin A. P., (1976) *Itel'menskij jazyk*. Nauka, Leningrad.
- Wichmann, Søren (2008) Case Relations in Tlapanec, a Head-Marking Language. A. Malchukov and A. Spencer ed. *The Oxford Handbook of Case*. 797-807.
- Worth, Dean S. (1961) *Kamchadal Text Collected by W. Jochelson*. The Hague. Mouton.

Verbal Person Marking System in Itelmen

Chikako ONO
(Chiba University)

In Itelmen (a Chukotko-Kamchatkan language spoken in Kamchatka of the Russian Federation), the person and the number (1st, 2nd, and 3rd person and singular and plural, respectively) are marked by verbal affixation. In most cases, verbs conjugate by person and number of the intransitive subject and the transitive direct object. Itelmen also includes person conjugation with oblique arguments, and this conjugation occurs frequently. Semantic roles of the oblique person markers are mostly possessive, locative, and directive. Note that verbal person markers not only indicate the subject, the direct object, and the oblique argument, but also express person of reason or purpose of the action without overt argument. It is assumed that the main function of verbal person markers in Itelmen is to indicate which person is prominent in the discourse.

(おの・ちかこ chono@mac.com)